

駿府城再考

駿府城は、今から約400年前、徳川家康によって築造された。

その後幕府を開き、嫡男の秀忠に将軍職を譲ると、大御所となって駿府城に居城することになった。その築城は、諸大名に工事を分担させ、献身度を競わせたことから「天下普請」と言われている。

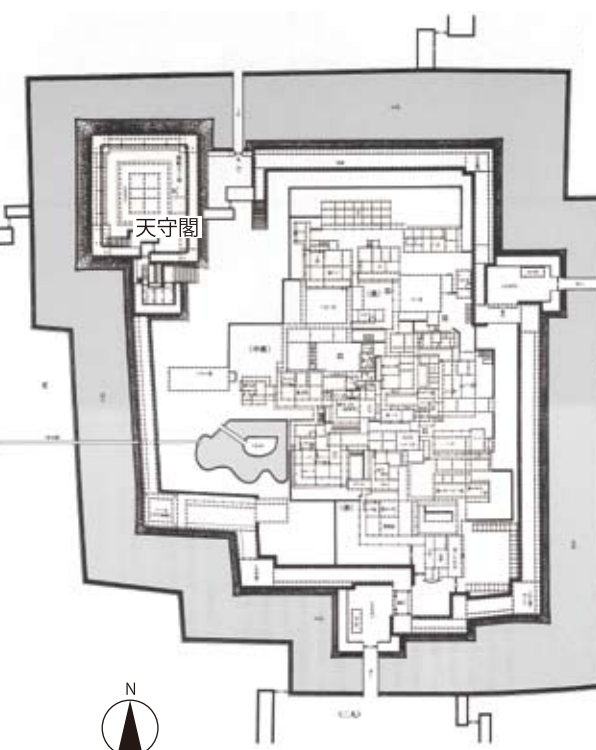
元和2年（1616年）4月に家康が駿府城にて死去。後の寛永12年（1635年）11月に駿府城は焼失した。

駿府城二丸の巽櫓は、平成元年静岡市政100周年記念事業の一つとして建設された。巽櫓は寛永年間の再建時の姿を目指した本格的な木造建築物で城郭建築の習慣・工法にしたがって施工された。これによって駿府城址における城再考と、駿府城への憧憬の念が高まった。

今回改めて、駿府城絵図をもとにした、城の再現を行ってみたが、平成19年6月にNPO法人静岡文化・創造協議会より発行された『駿府城の建築（駿府城復元図）』のあとがきには、駿府城の文化的、建築（史）的、技術的評価の高さが記されており、これを読むと駿府城、とりわけ天守への思いが再燃させられる。

「・・・結言としては、駿府城は、富士の霊峰を玄武に見立てる我が国第一の景勝の地に土姓環郭式に都市計画（縄張）される。環立式後期望楼型の天守は、5層7階に計画され、金銀はもとより、銅・白鐵を多用して飾る華麗なデザインを日本建築史上最初に試みる技術性をふまえて、真壁仕様廻縁をもつ御殿風であり、軍事性を強調した城郭遺構、例えば姫路城天守とは根本的に異なる伝統的意匠である。

要するに駿府城天守の建築様式は、「天下の格」において、古代宮廷文化→中世の武家文化を正統的に継承すべき文化意識に醸成されたものと思われる。足利義満の北山殿金閣や織田信長の安土城天守の伝統に直結する造形であり、従来ほとんど知られなかった駿府城の特質である。本丸御殿を含めた城郭建築の総合像において、至高の文化性を近世にあらためて先鞭として整えたのである。この駿府城の存在あってこそ江戸幕府は、江戸城・名古屋城・二条城等を通じて、日本の近世文化を3世紀の永きにわたってリードできたわけであろう。」



駿府城配置図 S1:5000 ※1



駿府城本丸絵図 ©内藤昌、文化環境計画研究所、上野隼夫(画)



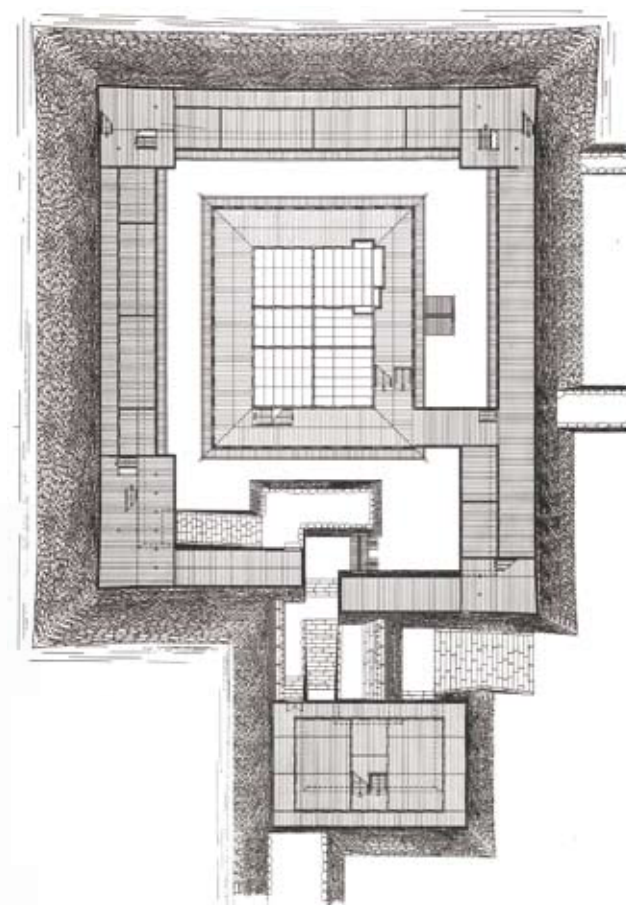
天守閣東側立面図 S1:400 ※2



名古屋市博物館蔵『駿府築城図屏風』



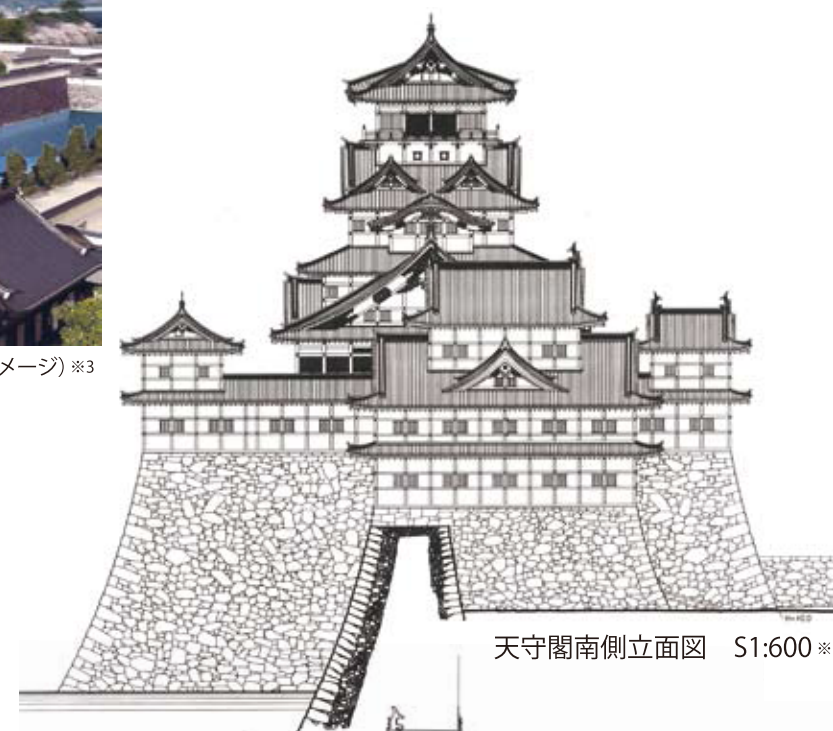
駿府城景観予想図(再建時のイメージ) ※3



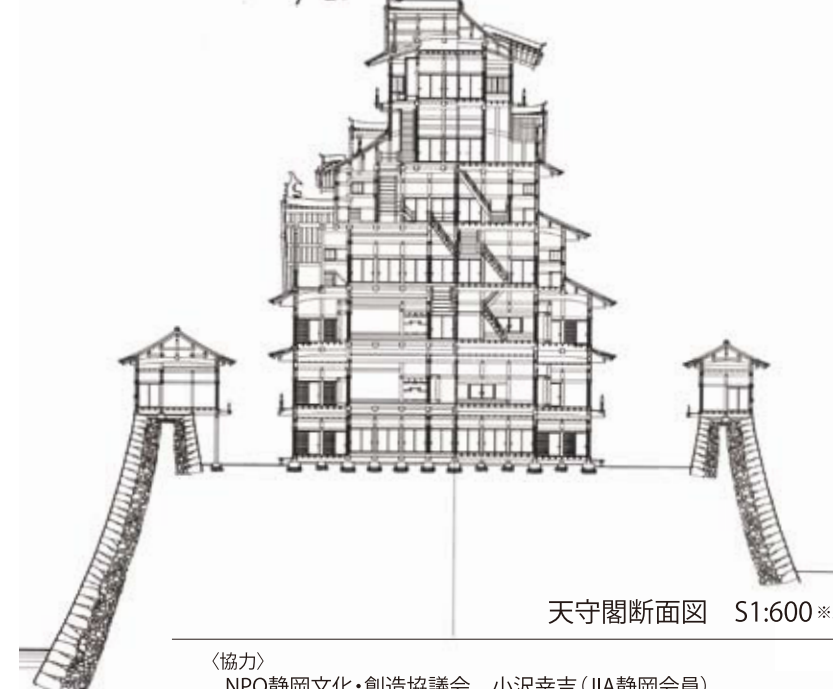
天守閣平面図 S1:800 ※2



現在の駿府公園周辺の航空写真



天守閣南側立面図 S1:600 ※2



天守閣断面図 S1:600 ※2

〈協力〉
NPO静岡文化・創造協議会 小沢幸吉(JIA静岡会員)

〈出典〉

※1:駿府城の建築(駿府城復元図)、平成19年6月発行、NPO法人静岡文化・創造協議会

※2:駿府城、平成12年3月発行、駿府城再建準備委員会

※3:NPO法人静岡文化・創造協議会